

## 第18節

तरवः किं न जीवन्ति भस्त्राः किं न श्वसन्त्युत ।  
न खादन्ति न मेहन्ति किं ग्रामे पशवोऽपरे ॥ १८ ॥

*taravaḥ kiṁ na jīvanti*  
*bhastrāḥ kiṁ na śvasanty uta*  
*na khādanti na mehanti*  
*kiṁ grāme paśavo 'pare*

*taravaḥ*—木々; *kiṁ*—〜かどうか; *na*—〜しない; *jīvanti*—生きている; *bhastrāḥ*—ふいご; *kiṁ*—〜かどうか; *na*—〜しない; *śvasanti*—呼吸をする; *uta*—もまた; *na*—〜しない; *khādanti*—食べる; *na*—〜しない; *mehanti*—精液を射精する; *kiṁ*—〜かどうか; *grāme*—周辺で; *paśavaḥ*—動物のような生き物; *apare*—他の者たち。

木たちは生きていないでしょうか。鍛冶屋のふいごが呼吸をしていないでしょうか。私たちの周辺にいる獣たちが食べ、射精していないでしょうか。

## 要旨解説

現代の物質的な人たちは、生活、あるいは生活にまつわるものは、神智学や神学の論点にはならない、と言います。生活というものは、食べ、飲み、性的快楽、愉快的暮らし、毎日を楽しむために、生きる時間をできるだけ延ばすためにある、と考えているのです。現代人は物質科学を高めて永遠に生きたいと願い、最大限に寿命を延ばそうとする愚かな理論が無数にあります。しかし『シュリーマド・バーガヴァタム』は、「人の一生は、食べ、性生活を楽しみ、飲み、浮かれ楽しむという快樂主義哲学のために経済的に豊かになったり物質科学を発達させたりするためにあるのではない」と断言します。一生はタバッシャのために、すなわち人間生活が終わったあとに永遠な生活に入ることができるようにみずからを清めるためにあるのです。

物質主義者はできるだけ長生きをしたいと思っています。来世についてなにも知らないからです。いま生きている間にできるだけ快適にすごしたいと考えるのですが、その考えも、死んだあとの命はない、と信じて疑わないからです。生命体の永遠性と物質界の移り変わりについて知らないことが、現代社会に大きな混乱をもたらしています。だからこそ数々の問題が起こり、さらに現代人が作りだす雑多な計画のために膨らみ続けています。

問題を解決しようとしているのに余計に問題を悪化させているのです。また、100年以上生きられたとしても、文化が高まるわけでもない。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、何百年・何千年も生きる木がいる、と言います。ヴリンダーヴァナには、（イムリタラという場所に）1本のタマリンドの木があり、主クリシュナの時代からそこに立っている、と言われています。カルカッタ植物園には5000年以上とされている菩提樹がありますが、そのような木は世界各地で確認されています。スヴァーミー・シャンカラチャーリヤは32年、主チャイタンニヤも48年しか生きていません。だからといって、長い歳月を生きた木々がシャンカラやチャイタンニヤよりも重要な存在である、ということでしょうか。「木は呼吸していないから命が宿っているわけではない」と考える人もいます。しかし、現代科学者ボセがすでに証明しているように、植物にも生命が宿っています。必ずしも呼吸が生命の兆しだとはかぎりません。『シュリーマド・バーガヴァタム』は、鍛冶屋の「ふいご」は大きな音をたてて呼吸をしているように見えるが、命があるわけではない、と言います。物質主義者は、木の生命体と人間の生命体とは比べられない、なぜなら人間はごちそうを食べたりセックスを楽しんだりできるが木にはそれができないのだから、と主張します。その主張に対して『シュリーマド・バーガヴァタム』は、同じ村で人と住んでいる犬や豚のようなほかの動物も食べたりセックスを楽しんだりしているではないか、と言います。この「ほかの動物たち」ということばは、食べ、呼吸し、性生活で構成されている動物生活を改善する計画をたてている人間たちも、結局は、人間の姿をした動物と同じだということをほのめかしています。そのような洗練された動物の社会は、苦しむ人々になんの恩恵ももたらすことはできません。動物はほかの動物にいくらでも危害を加えても、良いことはほとんどしないからです。